

慰安婦問題の加害者として20数年間沈黙しつづけた元記者

『文藝春秋』編集部は、「慰安婦になった経緯がどうであれ、十代の娘が慰安婦にさせられたという事実に向き合うことが、大切なのではないだろうか。そのつらい思い、悔しい気持ちに寄り添うことこそが必要なのではないか。」という元記者の記述に対しても、「私は被害にあいました」と強く主張する人がいて、どこで、どういうふうに被害にあったのかを聞くと、そのたびに言うことが違う。その真実を見極めることこそがジャーナリズムの仕事であって、「寄り添う」ことが最初の目的ではない。実は朝日新聞の検証記事も植村氏と同じ論理だ。ここにジャーナリズムの危機がある。」と、当然の反論を行っている。

ここで789号でも引用しているが、作家の塩野七生が『文藝春秋』(14.10)掲載のエッセーで、「元慰安婦たちの聴き取り調査を行なったということだが、当事者本人の証言といえども頭から信ずることはできないという人間性の現実を、調査しそれを基にして記事を書いた人は考えなかったのであろうか」。人間には、事実と反することを《言い張る性向がある。しかも、それをくり返して口にしていくうちに、自分でもそうと信じきってしまうようになる》ので、「それを基にした記事を書く側は、『元慰安婦に寄り添い、気持ちを深く理解する』とし、裏付け調査などを行わなかった」では済まないのである。対象に寄り添う暖かい感情をもつと同時に、一方では、離れた視点に立つクールさも合わせ持っていないと、言論で生きていく資格はない。なぜなら、対象に同情しすぎることは、問題のすり替え、つまり、読む人の関心を別の道に誘導してしまうことになりかねないからである。」と書いていたことを、改めてもちだしてもよいかもしれない。

元記者は《そのつらい思い、悔しい気持ちに寄り添うことこそが必要なの》に、「十代の娘が慰安婦にさせられたという事実」を頭から疑^{もと}ってかかるように、根掘り葉掘り聞きだそうとしたり、調査をしようとするなど、人の道にも悖ることではないか、というニュアンスを帯びた思いを述べているのに対して、塩野ははっきりと《対象に寄り添う暖かい感情をもつと同時に、一方では、離れた視点に立つクールさも合わせ持っていないと、言論で生きていく資格はない。》と、釘を刺しているのである。もちろん、元記者は23年前から《言論で生きていく資格はない》ことを、臆面もなく告白していることになるのだ。そんな《言論で生きていく》のがおぞましくれば、言論界をやめればよかったのに、そうせずにいられたということは、元記者の属する朝日がそんな体質でありつづけたということもさらけだしていたのである。

書くということは疑問を引き寄せつづけることであるという真理に従って、さらにいえば、元記者は元慰安婦以外の、さまざまな事件の被害者とみなされる人たちの《つらい思い、悔しい気持ちに》も、わけへだてなく《寄り添うこと》を記者にとっての基本的な態度としているのだろうか。そして、《被害者は、被害者ではないのか。》として、もしかすると被害者であることを否定することになるかもしれない裏付け調査なども行わなかったのであろうか。それとも、元慰安婦たちに対してだけはそうしてはならないということだったのだろうか。もしそうであるなら、それはどのような理由に基づいているのであろうか。元記者は本当に元慰安婦の《つらい思い、悔しい気持ちに寄り添う》ってきたのだろうか。そう思い込んで記事を書いてきただけではなかったのか。元慰安婦の《つらい思い、悔しい気持ちに寄り添う》ような記事を書かなければダメだ、ということを強調したかっただけのことではないのか。

さて、元記者の手記に対する最大の疑問は、20数年間の「沈黙」である。手記はこの「沈黙」に向き合いながら書いてきたものではなかった。週刊誌によるバッシングを契機に、勤務先の大学に脅迫状が送られてくるようになって、家族への身の危険や自分の雇用不安から批判～非難に対処せざるをえなくなったという、緊急避難的な意味合いが強いように思われたが、手記掲載一カ月後の告訴からすれば、告訴を視野に入れた手記の発表だったようにも思われる。

検証記事によってより一層朝日に対するバッシングが増すなかで元記者に対するバッシングも激しくなったが、その理由について手記では4点を挙げている。①朝日の記者として他紙に先駆けて元慰安婦について報道し、慰安婦問題を国際的な問題にしたこと、②慰安婦問題を熱心に報道してきた朝日と記者への嫌悪、③韓国人との結婚、④遺族会幹部の義母の詐欺事件での逮捕・起訴であるが、私

からすれば、最大の理由と考えられる20数年間の「沈黙」が欠損している。このことは、元記者の中では20数年間の「沈黙」は理由に挙げねばならないほどの問題とはみなされていないということを物語っていた。

元慰安婦の録音テープを聞いて書いた記事について元記者は、《私は大切な一步を踏み出したと考えた》と手記に記している。だがこの《大切な一步》に対する最初の批判が提出されたとき、元記者は《当時、週刊「朝日ジャーナル」に反論を書きたいと思ったが、上司らから「放っておけ」とアドバイスされたこともあり、実行しなかった》と書いており、要するに、無視し放置したのである。私自身も元記者の記事についていくつかの疑問を列記したように、批判者が多くの人が同意する疑問を提出していたなら、元記者はきちんと反論しなければならなかった。《当時、週刊「朝日ジャーナル」に反論を書きたいと思った》のであれば、なんとしてでもそうする必要があった。記事によって《大切な一步を踏み出したと考えた》のであれば、《大切な一步》を持続させるためにも反論しなければならなかった。批判は記事そのものが招き寄せたものであったから、記事の誤謬、矛盾、手落ち等を是正する方向で、あらゆる批判を歓迎する姿勢が求められていた。

しかし、元記者が批判に対して沈黙したとき、彼にとっての《大切な一步》に対しても沈黙することになったのである。そして《大切な一步》を持続させずに、選びとった沈黙を持続させることになったのだ。もちろん、元記者の記事が歪んだ慰安婦問題を引きずりだす発端となったとみている批判者たちは、慰安婦問題がますます激化するなかで彼の記事に対する批判を執拗に繰り返すことになるのは当然のことであった。だが元記者がその記事に対して沈黙しつづければ沈黙するほど、その沈黙は批判の正当性を際立たせていくことになった。沈黙は批判に答えられないことの証とみなされていたのである。

元記者は正当ではない批判には答える義務はないと思って、沈黙しつづけていたかもしれないが、公表された記事に対する批判が正当であるかどうかを決定するのは書き手ではなく、読み手であった。元記者が正当ではない批判と思ったとしても、疑問が提出されている以上、その疑問にきちんと答えることによって批判がいかに的外れであるかを明らかにする義務と責任が、記事の書き手にはあった。記者の特権として書きっぱなしが許されるはずもなかった。

元記者が「思慮不足」であることは何度か指摘してきたが、この「思慮不足」は自身の沈黙に対しても当然ながら向けられていた。沈黙しつづけることによって何も答えないという意思を表示していたとしても、沈黙もまた雄弁であることには思っていたらなかったのである。黙っていることによって、実に多くのことを語っていたのだ。そのうちの大きな声の一つは、「卑怯」と叫んでいた。沈黙は記者としての義務と責任の放棄以外の何ものでもなかった。批判やバッシングからは逃れられても、沈黙からは逃れられないことを元記者は沈黙しつづけるなかで学んでこなかったのだ。〈沈黙もまた成長する〉し、〈沈黙のなかで深淵が育まれていく〉ということ、元記者の「思慮不足」にむかって投げかけておかなくてはならない。

「慰安婦問題」報道のなかで朝日の《記者たちの委縮が進んでいるように思える。こんなにバッシングを受けている先輩を見れば、当然なのかもしれない。しかし、そこが私を攻撃する勢力の「狙い」なのではないか。後輩記者たちには頑張ってもらいたいと思うし、私もきちんと向き合わなければならないと思う。》と書いていることにも首を傾げるのは、《後輩記者たちには頑張ってもらいたいと思う》前に、後輩記者たちに沈黙の中に逃げない自分の頑張っている姿を見せることがなによりであることに気づいていないからだ。

元記者の手記を掲載している『文藝春秋』の前月号(14.12)には「朝日新聞若手社員に緊急大アンケート」が掲載されており、元記者の後輩記者の声(40代以上、男性、編集局、東京本社)が次のように寄せられている。「②池上コラム不掲載について」は、《あれは社内の体質を表していると思う。会社に異を唱える記者は次々に編集の現場からいなくなっている。いま、早期退職制度で優秀な記者がやめている。自分と違う主張、反論を認めることができない。それが植村記者に対して「おかしい」という異論を消したのだろうし、文化大革命で中国を礼賛して「虐殺が起きているんじゃないか」と異を唱える記者を外していき、北朝鮮を自由な国だと褒め称え、社会主義に異を唱える人間を消していった。》と回答し、また、《植村記者は自分が脅迫されたときは紙面に出てくる。その前にも、きちっと顔を出して弁明すべきだったと思う。自分が嫌がらせされたということで、被害者のように出ている。ああいうときだけ紙面を提供してしまうのはおかしいと思う。》という疑問を挙げている。